The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	変化と農民社会 : 農民概念の再検討
Author(s)	春日, 直樹
Citation	年報人間科学. 1981, 2, p. 111-134
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4848
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

変化と農民社会

——農民概念の再検討——

春日直樹

Ⅰ　農民研究の動向
Ⅱ　シナカンタン
Ⅲ　ベセーダス
Ⅳ　ブルーソン
Ⅴ　農民とコミュニティー
　1　あたらしい文化の摂取
　2　自文化の意識
　3　コミュニティー
　4　二つの農民性
Ⅵ　農民と外社会
　1　ベセーダス
　2　シナカンタン
　3　ブルーソン
　4　二つの農民性
Ⅶ　結　論
注
文献

Ⅰ　農民研究の動向

「農民（peasant）」の研究は、人類学において、先ずKroeber、続いてRedfield、更にはFosterらにより発展させられてきた。彼らは共通に、農民社会と文化とを都市化や産業化のコンテキストの中で論じている。それは地域的諸連関の範囲内で変化の姿を扱ったものである。だが現在、われわれが農民を捉える場合には、これらの要因に加えて国民化・商業化・西洋化・教育や医療の普及など、より広範な変化の総体、つまり近代化の問題を無視してとおるわけにはいかない。

ところでこの近代化と農民変化というテーマは、当の近代化自体の行き詰まり、あるいは「開発」の難しさを反映して様々な形で再考を迫られつつある。たとえばPotterやShaninは、変化の多様性を考慮した「近代化過程」の比較研究、「発展の基本段階としてアプローチしうる」類型化を主張している(1)。またDaltonは、ヨーロッパの

農民を参照しながら、世界の農民を諸段階の組み合わせとして整理しようとする。更にChiñasは、農民を近代化対象の一サブグループとして分析する方法を提示している。

これらの研究はあくまで近代化の枠組を捨てずに、農民社会と文化の多様性を探っていこうとするものであり、様々な混乱を移行形態下の現象とし、根強く抵抗する伝統を文化的遅滞として把握することを前提としている。しかし、近代化は必然なのだろうか。あるいは必然か否かにかかわらず、この枠組の中で彼らを理解することはどこまで可能なのだろうか。たとえば、近代化のモデルとなるのは欧米、日本の農民である。今、農民を「農業が暮らしであり生活様式である」(8)、且つ「部分文化を有する部分社会を構成する」(9)人々として出発するなら、われわれは確かに上記の地域で彼らが減少しているのをみ、またそれと対照に第三世界で彼らが「部族民からつくられつつある」(4)ことをみる。これども、この二つの事実から近代化・発展の下に多様な彼らの姿を並べることは必ずしも導けはしない。それは第一に、西欧や日本に根強く残る農民社会・文化の意味を見落とすことになるし、第二に、第三世界の農民の多くが近代ヨーロッパとの関係から生じた事実、つまり西欧と第三世界との相互連関の考察を欠落させることになってしまう。

農民の研究は部族やバンドのそれと較べると、動態的視点を不可欠としてきた。しかし、動態の分析は必ずしも近代化の枠組に従う必要はない。こう考えるとき、われわれは既に近年の研究の幾つかに、ひとつの示唆的な方向をみいだすことができる。

たとえば、Wolfは、農民を未開部族と産業社会との中間に位置する人々としながらも、移り変わる外社会との関係の中でその姿を追っていく姿勢を貫いている。農民の生活は時代・地域をこえて動的な状態にあり非農民との関係が絡まってくる。そこで「適応のひとつのタイプ、つまり農民の自己保全を脅かす社会体制の中で自己と系累を維持しようとしてなされる態度と活動の組合わせの形が問題になってくる」(5)という。

一方、Weinbergはこの「適応」という語を用いながらも、外社会からの便益とコミュニティーの生活様式との葛藤の側面から変化の姿を捉えようとしている。彼女はその際、これまで研究に一般的だった「独特で小さく、均質で自足的」というRedfieldのコミュニティー像を批判する。農民のコミュニティーは動的な外社会に対してたえず「調整的反応(6)」をしている、という。変化はそれゆえ段階的な断続ではなく、伝統を基幹とした連続となるのだ。

この伝統と農民社会の変化との時連は、Mintzがあたらしい視点から論じている(7)。彼らの保守性は決して盲目の慣習によるのではなく、権力・富・地位を異にする様々な人々によってそのシンボリックな意味と実際の効用を変えながら担われていく、という。

更に、従来の農民研究を、近代文化の接触と近代化とを短絡させたものとして批判するのはMigdalである。彼はこの背景として、これまでの理解が変化の障害物を個人的問題として処理したこと、また伝統的、パロキアルな諸制度の緊張が個人の選択に根本的に影響する点に殆んど注意を払わなかったこと、を上げている。そしてコ

ミュニティーの歴史的趨勢を、「村に根づいた行為と諸制度の少なくともその一部を、外からの容赦ない圧力に対する適応的反応として理解する[8]」観点から論じている。

以上の理論はアジア、ラテンアメリカ、ヨーロッパと様々な地域のフィールドワーク、民族誌に基づいて展開されているが、農民の変化を近代化の枠組からはずし、むしろ変化の中にこそ彼らの特質を求めるという点で共通している、といえる。そして、変化することと農民でありつづけることの連関は Wolf. Weinberg. Migdal により、適応（adaptation）としてあらわされる。この明確な定義はなされていないし、意味合も各々違っている。しかしいずれも農民がその諸特徴を保ちながら、農民そのものとして変わっていく際のプロセスをあらわす語として使用されている。

こうした把握は、Kroeber や Redfield らの研究と必ずしも対立する訳ではない。農民は独自の文化を有しながらも全体社会（whole society）の一員として生活している。だが外社会が歴史とともに変わっていくのであれば、彼らもまた「小さな伝統」をもって文明に参加する為に変わりつづけねばならない。その場合接触と変化は当然のこととして起こり、脱農民化を必然的に導くものとはいえない。つまり問題は近代の農民変化を特別な歴史的事象とし特定な枠組で把握しようとする前に、外社会の変化に対する彼ら自身のプロセスとして理解し直すことである。近代の変化が伝統的なそれとどのように異なるかは、むしろそののちに検討されるべきなのだ。

ここで農民と変化について以上の接近法をふりかえるとき、幾つかの課題が整理できる。

その第一は、農民とコミュニティーの関係である。Wolf は適応の主体を一農民として出発するが、この際勿論コミュニティーとの関連がとわれねばなるまい。一方 Migdal はコミュニティーを外圧に対する適応単位として考えるが、もっぱら農民を防御する機能の面に力点を置いている。これに対し Weinberg の捉えるそれは、防御の力だけでなく農民に誇りとアイデンティティーを与えるものである。

第二は、外社会と農民との関連である。Wolf や Migdal が外社会の圧力を強調するのに較べ、Weinberg は相互依存性を説いている。前者は租税、レント、強制売買、市場や工業製品の侵入など、国家や都市の強制力に重点を置いて変化をたどる。後者は都市文化の便益、外社会による保護政策などが逆にコミュニティー・農民文化を危機に陥れる可能性をもつ、と考えるのである。しかしそのいずれも、外社会との具体的関係の中で農民の変化を検討している。

第三は Mintz の提起したコミュニティーメンバーの多様化と伝統・変化の問題である。殊に、外との繋がりが彼ら相互の関係をどう変えていくのか、を問う必要があろう。

以下ではこれらの課題をふまえながら、シナカンタン（ZINACANTAN）、ベセーダス（BECEDAS）、ブルーソン（BRUSON）の事例[9]より、現代における農民変化の問題を論じていきたい。

押し寄せる近代化の波の中で、彼らはどのように変貌をとげどのようにその特質を維持しているのか。それを彼ら自身の適応のプロ

セスとして捉え直すものである。考察は過渡期の農民社会像を浮かび上がらせるとともに、人類学における農民概念の再検討を迫ることになる。

II　シナカンタン

シナカンタンは、チャパス（CHAPAS）高地に位置するマヤインディアンの町（municipio）である。人口は九、〇〇〇人余り、一五の部落とセンターHteklumとから構成されている。センターには教会、タウンホール、学校、診療所、商店などが立ち並び、部落の住民は祭や儀礼、交易、その他公的用件のある度にここを訪れる。

町は植民地以前の部族に基づいて発足している為、言語・風俗を共有し内娘単位でもあるシナカンテコ（Zinacanteco）社会と殆んど一致している。従って外社会に対する部分的依存についてみるとき、文化的側面よりは経済・政治的な面に、彼らの農民性があらわれている、といえる(10)。

チャパスにはこうしたかつての部族に基づき構成された数々の町があり、シナカンテコはその幾つかと儀礼や交易をつうじて密接な交流を保ってきた。絆は主に、都市サンクリストバル・デ・ラス・カサス(SANCRISTBAL DE LAS CASAS)を介して保たれている。町の住民と都市の住民は、各々高地のカテゴリーによるとインディオ（Indio）とラディノ（Ladino）にほぼ一致する。

インディオは伝統的に、コーン栽培を中心とする農業と交易とによって生計を支えている。革命後の土地改革は彼らが奪われた一部の土地の用益権だけは解放したが（ejido system）、Grijalva河床のもっとも肥沃な土地には手をつけなかった。その為彼らは人口過密な高地の他に、これらの谷間の借地を耕さねばならなくなっている。

シナカンテコを変えた直接的契機となったのは、第一にINI（Instituto Nacional Indigenista）、すなわちインディオ近代化計画の五〇年代からの実施である。この内容は教育・医療・政治・農業など多岐にわたっている。たとえば部落には学校が建てられスペイン語の読み書きが教えられている。センターには診療所が設置され、谷には品種や新技術開発をめざした試験場ができている。第二の契機は、パンアメリカンハイウェイの開通である。道路は、センター経由でサンクリストバルについじた旧来の荷馬車道とは異なり、センターを迂回し幾つかの部落の傍、あるいはただ中を通過している。更に彼らの生活を変えた第三の要因として、政府によるコーン買付の実施が上げられる。これによって安定した現金収入がより容易にもたらされつつあるのだ。

シナカンテコは当初、こうした変化に戸惑い、あるいは拒絶の態度さえとった。が、今日に至るまで徐々にその便益を受け入れ、かつての暮らしを変え始めている。

この現象はどの部落にも等しく進行した訳ではない。つまり谷間の耕地、ハイウェイからの距離を一大要因として、部落間の差異が生じているのである。もともと部落（各々名称と若干異なる慣習を有していた）は、彼らの生活の大半が展開される場であった。成員

は共通の気質をもつとされ、外部へ出掛ける際には一緒に行動することが多かった。特に女と子供の場合、交易・農業、そして、センターでの儀礼的職務（cargo）に携わることがない為、他部落の人間を殆んど知ることがない。谷間、ハイウェイに近い部落ではこうした成員が主体となって一早くグループを作り、バスやトラックを利用して肥沃な低地へと降りていったのである。

これと並行し、都市との往き来も頻繁化した。市場向けの出荷が増し、花作り・果樹栽培などあらたな種類の農業と交易とが集中してあらわれている。そして、富の象徴はロバから工業製品、特にトラックへと替わり、都市型の消費文化がとりわけ顕著に志向されるようになっている。

外社会との交流の増大はまた、スペイン語能力、教育・ラディノとの絆に対する評価を伴い、これらを身につけた男たちが人望を集めるという現象も生じさせている。その代表はINI職員である。彼らは未だ二、三〇代にもかかわらず、仲間たちとラディノの世界をとり結ぶ重要な役割を果しつつある。そして近代的インディオの自覚と誇りをもち、中には部落の、更には町全体の政治・儀礼上の重要な地位を占める者もあらわれている。

ところでこうした変化は先ず農業についてみた場合、あくまで彼らの伝統の延長上に発展した感が強い。利得をめざす生産と交易は、従来彼らの経済活動の一部をなしていたし、人雇い、借地・農作業と出荷、そしてその取引きなどは未だすべての伝統的形式でおこなわれている。それに主食コーンの特別視・栽培は、企業的経営の側面を強めた者たちの間にも変わることなく見出せる。INIによる品種・農法の改良も、コーンに関する限り殆んど受け入れられていないのだ。

伝統との連続性は、同様に儀礼・宗教的側面についてみたとき顕著となる。シナカンテコがあたらしい文化と頻繁に接しそれらをとり込んでいく過程は、儀礼の複雑化・創出とも結びついている。模範とすべき祖先の生活から逸脱するにつれて、彼らは神々の怒り、病気や事故に敏感となり畏怖の念を強めている。たとえば近代的医療サーヴィスを利用しながら治療儀礼に固執し、学校やハイウェイを受け入れながら、それに伴う事故をあらたな形の儀礼で静めようとしている。ただこれらは部落内の集団、もしくは部落そのものを単位とする儀礼である為、部落の暮らしの差異はこの面においても生じていることになる。

部落は既に述べたとおり、主にセンターをつうじて結びついている。そこは経済・政治・司法の中心であり、各部落の能力をこえた問題が代表者をつうじてインフォーマルな形で解決されてきた。しかしこのことは、何より宗教・儀礼上の位置と関連している。シナカンテコの生活は、今日でも神々の世界とのつながりをぬきに理解することはできないし、センターは人間と神々の両世界の中心として存在しつづけるからである。そこは部族の祖先神が棲む山々によって囲まれ、またカソリックの重要な守護聖人を守る教会を有している。政治・司法上の諸制度はこうした宗教・儀礼的な側面と不可分に結びついているのだ。

センターが世界の中心でありシナカンテコ統合の要であることを象徴するひとつに、有名なカルゴ・システムがある。カルゴの経歴は、年齢の序列と並んで部落の人間関係に影響を及ぼすだけでなく、面識のない異部落の人間どおしに互いの位置づけを与えることができる。また、役職をつうじて芽ばえた親交は部落をこえて存続していくことも多い。システムは、財力に応じすべての成年男子が参加する、という原則に基づいていた為、シナカンテコのメンバーシップそのものと結びついていた。カルゴの要請を正当な理由なしに拒否する者は、部落の中でも反社会的人間として扱われ、時には自らラディノへの道を選んで都市へと姿を消していった。更にシステムは closed community の存続とも結びついていた。成員の富は宗教上のランクに移しかえられることを要求され、社会は彼らの経済的層化を防ぎながら外社会からの孤立性を守り、独自の価値・世界観を維持してきたのである。

このシステムが変形を余儀なくされていることは、既に主張されてきた（Cancian：1965）。人口増加と経済的機会拡大による富増大とは、システムがすべての成年男子を包含し経済的均質化を進めるということを不可能にさせるからである。ところが都市の影響を顕著に受けた部落の幾つかは、従来のセンターとは別の、あらたなカルゴを、守護聖人創出、チャペル建設、フィエスタ変形などとともに自ら創出し始めたのである。このカルゴはセンターのそれとは異なり、富・時間の莫大な出費や全員参加の原則を意識的にとり除いている。つまり、神々の体系を崩さぬまま都市文化とり込みを可能にする、あらたな形に変えられたのである。これらの住民の多くは、従来のカルゴへの参加自体を希望しなくなりつつある。そして部落の中には富や人口においてもセンターを凌駕し、対立と独立の気運さえ生んでいるものもある。事実、都市との交流が増すにつれ、センターの有していた経済・娯楽・情報伝達などの機能は低下したといえる。あたらしい文化はしばしばセンターを経由せぬままに、直接ハイウェイから入ってくるようになったのである。こうしてセンターのカルゴを介した町全体の統合が弱まりつつあるといえる。

彼らは神々の体系や通婚、言語、特産物をつうじ部族意識をとどめてはいるが、その一方あらたな文化を摂取しながら部落の文化的差異・独立性を高めつつあるのである。

III　ベセーダス

ベセーダスは、厳しい冬と冷涼な夏に特徴づけられるシィエラ・デ・ベハール（Sierra de Béjar）の一村落である。

村は六〇年からの十年間、大都市の産業化に伴う急激な変化をたどっている。それを端的にあらわすのが、マドリー・バルセロナなどへの若者を中心にした移住であり、人口はこの間一、一〇〇から八〇〇に減少している。移住者の多くは都市のあらたな暮らしにあこがれ、教育・就職を直接の理由に、「活気」（ambiente）に乏しい村を出たのである。彼らはそこで生活を享受しながらも、殆んど相互のつながりのないままに暮らしている。そして階層や経済状態を問

わず、〝ベセーダスの「息子」〟（'hijos' de Becedas）の自覚をもち、村にとどまる者との間に頻繁な往き来を保っている。このことは家族を残しているか否かとも関係ない。かりに家族ごと移住した場合でも親族の絆（交流増加、相続をめぐる緊張の緩和などは、かつてと較べこれを強化してさえいる）の存在する間は、殆んどが村人たちと親密な交流を続けているのだ。

移住者の多くは依然土地や家屋を残しており(11)、その管理を兼ねて充分な休暇のとれるかぎり、自家用車、タクシーで村に帰ってくる。年中行事や親類・友人・隣保の儀礼の際には、むしろ帰省が求められている。その上結婚式や冬のmatanzaにおいては、自身が主催者になることも多い。彼らは村にとどまる間、特別なグループを作ることなしに全くの村人としてふるまうし、またそれが要求される。たとえば、隣保と並んで家事や畑仕事をするのもみることができるのだ。

一方村にとどまった者たちも、家族として親類として、あるいは友人、隣保として移住者の側を訪れる。今日ではたいていの家庭（通常核家族で構成）が都市在住の「息子」を有している。彼らは年々移住者をパトロン的に利用する傾向を強め、その関係維持に敏感になりつつある。「息子」たちは衣類、無利子のローン、医療のアドバイス、それに滞在の場を提供するだけでなく、就職や教育の面倒までみてくれる。都市のあらたな生活についてもまた、彼らから教わることができる。こうして、村人は経済上の利益や安全、目新しさなどを移住者よりひきだし、移住者は村における威信を獲得しているのである。村には都市の「息子」たちのいない日は殆んどなく、また村人か否かのみきわめさえ難しい者もあらわれている。

以上の変化は、確かにベセーダスの自立性が弱まるプロセスでもある。村人の暮らしは今日、物質的側面はもとより情報・教育・医療、そして祭をはじめとする儀礼の面でも移住者の存在を必要としているし、近隣集団や青年組織も彼らをぬきに考えることができなくなっている。更にこれに並行して、村内には都会のスタイルで都市の製品、サーヴィスを売る店が営まれ始めた。つまり、村の内外からあたらしい生活様式がすすんでとり込まれており、暮らしそのものが外社会との頻繁な交流ぬきに成り立たなくなっているのである。

ただこのことは、彼らの場所的な流動性を増大させてはいない。あたらしい店の出現と「息子」たちの来訪の為に、彼らは逆に村外へ出る機会を減少させてさえいる。それは人口流出のもたらした農業の経営規模拡大・収入増加とも関連している。つまり移住者が農地を売りあるいは村人に貸与していったことによって、農業に専念し農業で生計を立てることが可能になったのである。この間、彼らの生活はより均質性を強め、労働力不足とあいまって均衡的互酬に基づくあらたな協同労働も生んでいる。

農業についていえば、都市の生活様式のとり込みと並行して換金作物部門の拡大、仲買人出現、マーケティングの分離、機械化などが確かに進行している。しかし依然、宗教上の暦に沿ったリズムで各家庭を基本単位にして営まれており、主食・儀礼と関わる伝統的

穀物の小麦を根強く自給しつづける「二元的経済の枠組」(12)を保っている。経営の均質化、土地に対するコントロール増大、更に協同労働の発生などをみるとき、彼らの農業はますます生活と非分離な性質を強めているのだ。

村人の暮らしが都市のそれに近づいたことは間違いない。彼らがマドリーの文化に対し抱くあこがれや志向性はきわめて顕著であり、時にはそこで行なわれているか否かが、行動様式を正当化する根拠になることさえある。都市文化の摂取は「進んでいる」(adelanta'o)とみなされて威信を与えられ、逆にいつまでも古い様式に固執すれば「遅れている」(atrasa'o)と批判されるのである。

しかしこの一方、彼らはベセーダスの村人(pueblo)としての自覚も捨ててはいない。村は彼らにとって依然「小さなくに」(patria chica)である。そしてここで暮らす人間は、誰もが基本的に平等と考えられている。村人の関係を伝統的に特徴づけてきたこの平等性は、生活の均質化とともにますます強まりつつある。彼らは私的領域を極力縮少しながら頻繁なコミュニケーションの網を張りめぐらしている。通常の暮らしをつづけていく為には、移住者か否かにかかわらず、親類や友人を有し隣保を形成してこの網の中に加わっていかねばならない。そして各々の関係に応じた義務や権利、ふるまい方は、都市の影響を受け具体的内容を変えてはいるが(儀礼の簡略化、均衡的互酬の発達など)、村においては依然無視しさることができないのである。

日常、彼らは自己と家庭をたえず開いておかねばならない。つまり秘密をもってはならない、とされている。しかもこのことは、都市の文化をあたらしくとり入れた者について殊に敏感に要求されている。たとえば改築・家具や家庭用品購入の直後には、興味を抱く村の人間すべてを中に迎え入れねばならず、それを怠ると「お高い」(ergullosos)「冷たい」(estúpidos)ということになって日常の人間関係から締めだされることもある。逆に、私的な領域を開き村の生活に積極的に参加しているかぎり、たとえば扶助は各関係に応じた村人から容易に期待でき、支障ない生活がつづけられる。

こうした伝統的暮らしは時にうっとおしさを感じさせてはいるが、尚今日でも生きている。このことは勿論、村に滞在する移住者たちにもいえる。たとえ彼らがパトロン的役割を果たしつつあっても、依然ベセーダスの「息子」だからである。

Ⅳ　ブルーソン

ブルーソンは、スイスの南ヴァレー(Valais)州バニェ(Bagnes)の谷に位置する、人口二五〇の山村である。村人はアルペン酪農を中心とする農業と、雪深い冬の間の出稼ぎによってその生活を支えてきた。

この半世紀の間、村は大きな変化をとげている。その第一は低地の町の産業化・生活の都市化が導いた未婚者中心の人口流出である。農業はいやしくひきあわぬものとされ、職業教育を修め町に暮らすことが親たちからも望まれるようになった。こうして結婚した

若者が再び土地に戻る近年の傾向が生じるまで、人口は約半分にまで減じつづけたのである。

一方、村にとどまった成年男子の殆んどは、村外での兼業に従事する農民―労働者や労働者―農民となっている。この彼らが村に残りつつ暮らしを変えていくことができた背景には、コミューンやカントンが村を守る為にとった近くの工場建設、農産物価格の支持、近代的公共サーヴィス提供などの措置がある。村はまた収入増加を目指してコミューンの観光業推進計画を受け入れており、関係施設の出現とともに外からの人々との接触を頻繁化させている。こうした中で、彼らの生活は低地のそれに近づきつつある。変化は勿論、農業にも起こっている。たとえば、伝統的酪農組合 consortage は各農家の兼業化を可能にする為合理化・機械化を進めたし、労働力の中心は妻や子供たちへと移行した。同時に換金作物部門が拡大し、利得獲得を前面にだした新しい経済的組合も形成されている。

ところがまた以上の変化の一方、村の男の殆んどは若者をとわず依然自称 paysan である。この言葉は職業というより、生き方・暮らし方をあらわしている。つまり彼らによれば paysan とは土地を愛し土地に働く男であり、且つ他ならぬ彼自身の土地を耕す男である。それは何より、私有財産に基づく自由というイデオロギーの具現である、という。

確かに村人の私有財産・自由は、この半世紀をつうじ、私的生活の核 ménage によって担われつづけている。ménage とは生産・消費・調整をともにする人々の集団、として定義される。原則的には結婚により生じる為、その成員はたいてい核家族と一致している。集団の特質は先ず、方言で feu（火）と一致することからわかるように、料理と食事の排他性にあるといえる。財産は夫と妻が各々相続した部分からなるが、これを管理するのは通常夫とされている。彼は「運営の長」（chef de l'exploitation）として、村の経済的グループの成員権を与えられている。そして成員の自由を守るべく、資産のバランスある「全き利用」（complete exploitation）を達成しようとしていく。このことは確かに、今日でも村人の農法・土地利用法に反映しつづけている。彼らは半世紀前と殆んど変わらぬ方法で、極力自給を旨とする農業を営んでいるからである。また多くの場合、夫たちは季節労働やパートタイムの形で働きながら、妻子の農作業を ménage の資産管理者として助けている。

村人としての自由は、ménage の負債を防ぐ努力によって保障されていく。負債の代表は、他の集団の食事排他性を侵す行為であり、従ってそれは特別な状況下（たとえば祝祭）においてのみ破られる。この ménage の自立性・食事排他性は今も全く変わっておらず、paysan の理念を堅固に支えているのである。

paysan はまた、彼らの誇りとする〈祖先たち〉（ancêtres）の暮らしそのものでもある。〈祖先たち〉とは、ブルーソンの地を開き伝統と財とを残した者として村人すべてが共有する精神的財産である。この〈祖先たち〉からは姓を同じくする父系外婚集団 famille が生じていくが、大切なのは新しく村に移住した者であっても数世代を経れば〈祖先たち〉の仲間入りを果たすことができ、その直系はあら

たなfamilleとして認められる、という点である。村人は原則的に何らかのfamilleに属することができる訳で、つまり互いに〈祖先たち〉とつながる「ひとつの家族のようだ」になるのだ。

ménageの長はかつて〈祖先たち〉が耕した土地を相続し、彼らの営んだ農業を使命＝職業（vocation）として受け継ぐ。酪農はその代表的部門であり、consortageには自立的ménageが構成するコミュニティーのイメージが変わらずに付与されている。また、ブドウ栽培とワインづくりも劣らぬ伝統である。彼らはワインのふるまいをつうじ仲間との親交を確かめあうが、この慣習は同じく村の伝統である他所者歓待の際にも依然生きつづけている。

ここで他所者との関係は、あくまで村人間のものとは明確に区別されている。それを象徴するのが、村人を結ぶ新しい互酬ネットワークの出現である。村にはquartierと呼ばれる幾つかの近隣集団があり、ménage間の互酬はこの成員の間で頻繁に行なわれていた。しかし公的サーヴィスがコミューンから提供され、また生活の都市化が集団の賄いうる以上の互酬内容を要求するに至ると、村人はあらたなネットワークを作り上げた。それは、負債なきménageの関係を支える「平等」の原理と、これとは逆に無償扶助を当然とする「ひとつの家族」の原理との両方に基づいて成り立つものである。つまりサーヴィスは「ひとつの家族」の精神でなされたのち、ménageの美食上の通貨（食事への招待、ワインふるまい等）で返される。それは他所者との取引きに用いられるインパーソナルな貨幣とは違い、「ひとつの家族」の間でのみ授受されうるものである。その上この互酬は、職業とみなされるサーヴィス（農業も含む）をも対象に組み入れている。このとき支払いはまず貨幣で行われ、のちに食事のふるまいによって「ひとつの家族」の確認がなされるのである。

こうして互酬のシステムは村人と他所者の一線を明確化しつつ、その内容と範囲とを拡大したことになる。彼らは「ひとつの家族」内の親交を別な親交、つまり他所者をも対象にしうる政治や経済的要素ぬきの私的親交、と区別している。前者は明確な親族制度と結びついているがゆえに公然と認められるが、後者はあくまで私的領域に閉じこめられたものとして、通常存在を明示されないことになる。つまり外社会との交流を増しその文化を摂取する中においても、村人は「ひとつの家族」の意識を捨てないままにブルーソンの生活を保っているのである。

V　農民とコミュニティー

シナカンタン、ベセーダス、ブルーソンのたどった変化に、近代化という枠組を直接あてはめることはできない。ある事例の近代的変化は、別の事例では正反対の方向をたどっている。たとえば生活の均質性はシナカンタンでは減少するが、ベセーダスでは農業への特化に伴って増大している。労働の分業化、内部の商取引きについても同様である。また儀礼の減少はベセーダスではみられるが、逆にシナカンタンでは反方向をたどっている。ここでは聖職者（シャーマン）さえ増加している。流動性についていえばシナカンタン、ブ

ルーソンでは高まるが、ベセーダスでは村を出る機会が減少している。一方、ある事例は顕著な変化がみられないが、別の事例で非近代的側面が強くなる場合がある。ベセーダスでは親族の絆が強化されたし、シナカンタンの低地での農業も親族関係の機能拡大に役立っている。協同労働や互酬のシステムは、ベセーダス、ブルーソンで増加しまたはあらたに作り直されている。

1、2では、こうした近代化の枠組を逸脱した変化のプロセスをたどり、各々に「共通の何か」(13)を考察していきたい。

1　あたらしい文化の摂取

各事例とも外社会の変化・コミュニケーションの拡大を伴っている。つまり、都市や町の産業化とあたらしい生活様式の出現、交通手段の改良と市場の拡大、教育やマスメディアをつうじた情報共有などである。この方向は政府や自治体によっても推進されている。

一方農民はこうした状況の変化に積極的に対応している。たとえばシナカンテコはINIのプログラムを選択的に受け入れたし、ハイウェイやコーン買付制度もすすんで利用している。ベセーダスとブルーソンの過疎化は、村人自らが移住を望んで進行していった。換金作物部門拡大、兼業化も彼らの選択による。更に、三つの事例には都市の物質文化や生活様式の評価と摂取とがみられる。彼らはあたらしい交通機関を利用し都市や町に出向いてもいる。つまり農民は確かにすすんで交流を増加させ、外社会の文化を摂取したのだ。

では、このような変化を支える彼ら自身の諸欲求は、従来の制度や道徳、価値によって直接的に導かれたものだろうか。

かつてベセーダスやブルーソンの農民が要求された村人としての暮らしは、決して今日のような都市に近いものではなかった。教育やパブ・カフェの利用は豊かであることをあらわしたが、都会の服装・マナーなどは目標とされるものではなく、儀礼の簡略化においては敬遠、批判されるべきものだった筈である。村は決して「活気」に乏しいところではなく、農業がいやしい職業として嫌われることもなかった。価値の変化はシナカンタンを考えると一層明らかになる。そこで志向されつつある暮らしは伝統的なものと反対でさえある。彼らは都市のラディノから蔑視されつつも、自文化を誇りとし続けてきた。富は町の中の威信を得るために何よりカルゴにつぎ込まれねばならなかったのである。

こうして農民は幾つかの条件が整ったとき、それまでの制度や価値からは直接導くことのできない考え方、行動をとり始めている。村を捨てることも、従来の組織を動揺、変質させることさえもある。彼らを変えた契機は、むしろ村外部での変化、外社会と農民とのコミュニケーションの変化である。そのとき豊かさは貧しさに変わり、誇りある暮らしはいやしい暮らしになる。

ここで上記の変化とは、彼らにとって具体的に次の局面をもってあらわれている。

(1)　外社会の文化と自文化との比較の場の増加

いずれの事例でもマスメディア・交通機関の発達、教育・医療の普及、あたらしい経済活動などが主な契機となっている。

(2) 両文化のギャップ拡大

これはベセーダス・ブルーソンの場合に顕著である。シナカンテコが格別欲するのもまた、トラック・ラジオなど都市のあたらしい文化である。

(3) 外社会の文化をとり込む機会・可能性の増加

都市や町の産業化、交通機関の発展、農作物市場の拡大、教育普及、政府や自治体の政策などは、あたらしい文化の摂取を容易にさせつつある。土地不足の解消も重要である。

以上のように、環境の移り変わりによって、農民は従来の考え方や行動を変え外社会の文化を積極的にとり込んでいく。それがこれまでの暮らしから直接には導かれないものならば、彼らの文化は所詮都市の産業化以前、外の文化をよく知らずまた摂取することも不可能な時にのみ、存在し続けるにすぎないのだろうか。しかしここで、彼らがこれと同時に示す非近代的側面の強化をどう理解するかという問題が、依然残るのである。

2 自文化の意識

外社会との交流増加、文化の摂取は確かに以前の生活様式が崩れていく過程であった。だがわれわれはこの一方で、自文化に対するより強い意識が彼らにあらわれるのをみる。すなわち伝統を基幹としながら、独自の暮らしを再編していく過程である。

シナカンタンでは、この現象はとりわけ儀礼の増加、複雑化にあらわれている。祖先の生活から逸脱するにつれ、彼らの多くは事故や病気にますます敏感になっている。そしてそれを静める為の儀礼は部落内の社会組織や部落そのものが単位となり、各集団の神々を対象としながらとりおこなわれる。事実、あたらしい活動は部落の仲間とともに始まったのだ。たとえば谷側の農地への移動、政府の買付所の利用、トラック購入などは、内部の人間関係に基づくグループ主体に進められている。ここで都市の生活様式の摂取が進展しつつある部落には、あたらしい形のカルゴが生まれている。それは旧システムの残存ではなく、都市文化をとり込む彼らが積極的に創出したものである。つまり、彼らは部落を単位としながら、あらたな生活に適合した形態でシステムを作り直したのである。これらの部落では、社会的地位の指針として機能したセンターのカルゴがその重要性を減じている。仲間の信望を獲得しつつあるのは、富を得、あるいは近代的教育を修めた男たちである。

ブルーソンのたどった変化もまた、自文化に対する意識の高まりぬきには説明できない。近隣集団に代わり村人全体を包含することとなった互酬ネットワークは、〈祖先たち〉を共有しその伝統を受け継いでいる「ひとつの家族」の理念のコンテキストにおいて、はじめて機能するからである。そして理念が強調され他所者との明確な区分がおこなわれていったのは、あたらしい文化の摂取、外部との交流の頻繁化、また村人相互の関係多様化といった過程においてであった。変化はここで村人のアイデンティティーを保つ一方、外の文化のとり込みをも可能にさせる方向で進展したのである。

ベセーダスでは、「息子」たちの絶え間ない帰省・滞在が従来の生

活様式をあらためて意識させることを導いた。村の生活は大都市のそれとしばしば比較されていく。都市文化のとり込みは評価の対象となると同時に、村で暮らす者としての要求が殊に顕在化する契機でもある。これを促す要因として暮らしの均質化も忘れてはならない。つまり仲間と異なる「お高い」「冷たい」人間の出現が、より一層敏感に察知されるからである。移住者についてみると、ここではブルーソンと対照的に、彼らを自分たちと等しく扱い同じ生活を守らせることによって自文化を維持している。

われわれはこのように三つの事例に、外社会と交流しその文化をとり込むに伴い自文化が強く意識されたことをみる。彼らは暮らしを作りかえつつその独自性を維持するが、この際決定的な単位となったのは部落や村であった。それらはもともと独自の生活を有しており、農民はこれを基幹としてあらたな文化の摂取をも容易にする形で、生活を再編するのである。非近代的な側面とはこの過程において顕著にあらわれている。

こうした彼らの側面は外社会の文化に対する志向と不可分に結びついているが、そこから直接導くことはできない。たとえば単にとり込みを目的としたものならば、あたらしいフィエスタは生まれることもなかったろう。「ひとつの家族」の互酬ネットワークがなくとも、職業上のサーヴィスは外社会と同じ形態でなされればよいし、移住者をパトロン的に利用するなら、村の生活を強要する必要もなかった筈である。つまり自文化の意識が高まり、村・村落の独特の生活が作りかえられていく過程は、外の文化の摂取とは不可分にして別のものなのだ。そして1で述べた側面とは対照的に、伝統に連続した形であらわれるのである。

3　コミュニティー

われわれは部落や村に、幾つかの共通な諸特徴をみることができる。

a、具体的な場における共住

農民は他ならぬその土地に共住している。集落・耕作地、それをとり囲む自然は他の場所に代替されることはできない。

b、メンバーシップの規定

メンバーか否かの境界は必ずしも厳格でない。が、その規定は不明瞭のうちにも存在してる。親族を有すること（シナカンタン）、〈祖先たち〉の姓を有すること（ブルーソン）、村に生まれることまたは生まれた者の配偶者となること（ベセーダス）が、各々主要である。

c、パーソナルな関係

メンバーの関係は、各人の個性によって影響を受ける。パターン化・制度化された領域においても個人的親交は強い力を及ぼす。

d、特殊な経済関係

村、部落内には親族・友人・隣保の関係に基づいて特殊な経済関係が存在する。それは、通常の生活を営む上で不可欠な関係である。

e、宗教・儀礼の共通性と共有

メンバーは原則的に同じ宗教を信仰しており、特有の年中行事を有している。また一生をつうじ認められた様式にのっとり、幾つか

の儀礼を通過する。

f、内婚的傾向

メンバー間の婚姻が多い（約八割）。

Smith（一九七七）、Weinberg（一九七五）、Brandes（一九七五）は特別な規定のないままに、各々部落と村をコミュニティーと称している。今、三つの事例に共通する以上の諸特徴をふまえるならば、われわれは彼らにならい確かに各々をコミュニティーと呼ぶことができるだろう。

ここで、メンバーの境界を決定づけようとすれば、それが困難な作業であることがわかる。ベセーダスの「息子」たち、都市に部屋を借りるシナカンタンのＩＮＩ職員などが典型であろう。しかし、農民のコミュニティーに関する閉じられた均質的なイメージを斥けるならば、ここではむしろ境界にこだわるより具体的な場に展開される生活そのものに目を向けるのが大切、と考える。メンバー決定が困難な者たちであっても、コミュニティーにとどまるかぎりは仲間に従い、独自の生活様式を守っていくのである。

この場合、そこにとどまる者たちは互いの差異をこえてひとつの評価の基準を共有しているのがわかる。つまり外社会のあたらしい生活様式の諸局面は、従来の土着の文化と較べ進んだ優ったものとされている。そしてそれをとり込む者はコミュニティーに認められる一定の様式を守ることをつうじ、威信を獲得することができるのだ。更に、ブルーソン、ベセーダスのようにあたらしい生活の一局面が普及したのちは、これを受け入れない人間が否定的評価をうけるようになる。たとえばシナカンタンのＩＮＩ職員、ベセーダスの都市からの「息子」たち、ブルーソンにおける町から戻ったインテリゲンチャたちは、仲間への援助・道徳の遵守などをコミュニティーの一員として実践することで人望を得ている。逆に、ベセーダスにおいて旧来の衣食住や儀礼の様式・家族構成などを変えないままの者、ブルーソンでは経営合理化や新産業に反対しつづける「進歩」を拒む者、などが否定的評価を受けている。いずれにせよ、威信や否定的評価がコミュニティーの生活を前提として導かれるのである。

4　二つの農民性

農民が外社会の文化を積極的に摂取する過程で、自文化を強く意識し始める場合、暮らしは部落・村というコミュニティーを重要な単位として再編される。また反対にこのコミュニティーの成員としての暮らしは、あらたな文化の摂取を捉す価値基準を内在させている。つまり彼らにとってコミュニティーの生活は、外からもたらされる文化のとり込みと対立するというより、むしろ補い合いながら存続しているのである[14]。

農民をコミュニティーとの関連で考察することは、今日まで主な接近法の一つであった。その代表が Redfield であり、彼は「ある似た種類のコミュニティーに生活するような人間[15]」として農民の概念を提案している。しかし以降の多くの研究は、近代化や都市化がコミュニティーの閉鎖性を弱まらせ、同時に進行するメンバーの多

様化・アイデンティティー分裂によってその弱体化や崩壊が進んでいく、と主張してきた。これに対し、コミュニティーの根強い存続を強調した少数の研究も、もっぱら変化への抵抗としての側面に焦点を当てたように思われる(16)。

一方、外社会文化の摂取の欲求という農民の側面も、文化的遅滞の理論を中心に論ぜられつづけている。この見解は摂取にかかわらず存続する独自の生活様式を、農民の理解不完全か単純化のため、あるいは都市の連続的イノヴェーションに追いつきえないことのため、として説明づける。そして、これらの要因は産業化社会において次第に消えていくので農民社会はその遅滞性とともに終わる、とする。

しかしこれまでみた事例に関するかぎり、コミュニティーの重要性、外社会文化との接解・とり込みは村立することなく不可分に結びついている。また文化的遅滞の理論の二つの観点、すなわち独自の生活の存続が理解不完全なとり込みにするという主張、及び産業都市がそうした生活様式をなくしていく、という主張もベセーダスをみるかぎり説得力を失なうように思える。ここでは産業都市の生活が一早く伝えられる。都市に暮らす「息子」たちは、決して文化を変形して持ち帰るのではない。が、その彼らは村においては村の生活様式を遵守している。そうせねばならないという充分な理由は、彼らの立場からもまた村人の立場からもみつけることはできない。つまり村の暮らしは都市の産業化、その文化の理解力にかかわらず、依然守られつづけているのだ。

こうしてわれわれは、従来論ぜられてきた農民の二側面、すなわちコミュニティーの生活様式に対する自覚と固執、そして外社会の文化の積極的とり込みの姿勢とが、近代においても損われることなく生きつづけ彼らをあたらしい状況に応じて変えつつも農民たらしめていることをみるのである。

Ⅵ　農民と外社会

農民とコミュニティーの変化とは、以上にみたように外社会とのかかわりぬきに論じることはできない。ここではその彼らが参加する外社会の考察をつうじ、各々の変化を比較したい。そして農民の二側面がどのように説明づけられるか、を試みてみたい。

1　ベセーダス

外社会とその関係がもっとも極端に変わったのは、ベセーダスの場合だろう。

五〇年代まで、村人の生活は約一五キロ東西の町、El Barco de Avila と Bejar の間にほぼ限定されていた。殊に後者は政治・宗教・経済の分野において中世から地域の中心地として栄えてきた。祭りや市場売買の折、町を訪れた村人は都会人と自分たちの差異を認識させられた。付近の村々は建築、服装、言語などにおいて共通性を有し、通婚もしばしばおこなわれていた。

しかし、五〇年代終わりから村にあらわれた変化とともに、これ

らの町や村々との関係もまた極端に変わっていった。若者中心に人口流出が進むと、主な移住先マドリー、バルセロナなどの大都市との絆があらたに生じ強化されていったのである。

これを可能にした第一の要因が都市の産業化であることはいうまでもない。村人は移住者やマスメディアをとおして都市のあたらしい生活を知り始めた。しかも、道路が整い車が普及すると村とマドリーは三時間半で結ばれるようになり、都市のイノヴェーションは直接的に村に入りこむようになったのだ。彼らの比較の対象も次第に大都市の人々へと移っていった。その上中央集権の徹底を目指した行政区・教会区の改革が歴史・文化の配慮を欠いて実施された為に、隣村やBejarの重要性は更に減少したのである。

こうして地域が弱まり大都市との絆が生じると、移住者の存在がより大きなものとなる。村人は都会の文化を摂取しあるいは種々のサーヴィスを得る為に、文化の橋渡しとなる者を強く必要としているのである。

2　シナカンタン

ここでは今日においても、都市サンクリストバルを中心にインディオの幾つかの町が結びつきを保っている。主にシナカンタンの他、Chamula・Amatenango・Oxchucの各町、その各部落である。

各町、各部落の関係は原則的に対等であり、交易、フィエスタにおける交流が存続している。一方、都市サンクリストバルは植民地時代の建築以来、国家とつながる支配者の住む場として栄えてきた。そこには現在、市場、役場、警察、軍隊、郵便局、病院などがある。住民の多くはラディノとされる。

この、インディオ―ラディノの両集団の関係は、未だ基本的性質を変えることなく、後者の優位なままに存続している。通婚は忌避され、親密な絆はCompadrazgoの身分関係においてのみ存在する。市場取引きの多くも後者が主導権を握っている。また、インディオの各町は自治体を保ってはいるが、ラディノのセクレタリオの監督をしばしば受けており、重要な決定は都市のラディノの行政官から下されることが多い。その上、諸儀礼においてはラディノ牧師の来訪を待たねばならない。

しかしラディノとの厳格な区分存続は、都市化の進みつつある部落の男たちにインディオに対するアイデンティティーの有無を否応なく迫るもの、といえる。彼らはなし崩し的にラディノへと変わることができない。また、都市にあこがれ始めても部落を出ることは容易でない。まず多くの者はスペイン語の能力を欠いている。それにラディノの世界でまともな職につくにはそれなりの富と足がかりが必要であるが、インディオとして育った彼らには通常この両方が欠けているのだ。仮りにそうした条件を満たせた場合でも、移住は仲間や親族との絶縁を必然的に伴うことになる。

彼らは部落を去ることよりもそこにとどまり、仲間と外のラディノ世界とをとり結ぶ役目を担うことを選んでいる。

3　ブルーソン

地域の中心地とコミュニティーとの関係はここでは全く異なっている。

バニェの谷の一二の村落は、中世より言語・宗教・風俗の共通性、通婚、交易、アルペン管理、防衛などをつうじて結ばれてきた。中心地と呼ぶべき最大の村(Le Châble)は確かに存在する。だが他村との関係は基本的に平等であり、文化的ギャップも少ない。こうした村々が長い過程を経て形づくってきたのが今日のコミューンである。それはカントン・連邦の形成に先立つ、バニェの人々の〝notre république〟である。各村落は外に対しては互いの文化的共通性を意識し強調する。が、内部にあっては地理・経済・言語・政治団体の構成比、そして「心性」において各個性を認め合っている。

このバニェをはじめとするコミューンが風土と歴史に基づき構成する更に大きな単位は、ヴァレーのカントン（l'Etat と呼ばれている）である。カントンの本質とは、コミューンの自治を守り連邦憲法で定められた個人の権利を擁護することにある、とされている。それは独自の憲法や財政をもつが、コミューンの強い権限のために行政範囲の限定を受け続けている。だがコミューン同様、政治・経済上の自立を強く志向している点は変わりがない。

過疎化による村の危機はコミューンの、そしてカントンの自立危機であった。従って前者はこれを食い止める為に諸政策を講じ、更にその財力をこえる対策が後者のレベルでなされたのである。ここで両者の外部への流出者が少なかったことに注目せねばならない(17)。そうした流出は言語や風俗などが著しく異なる他地域に足をふみ入れること、〝notre république〟〝l'Etat〟を離れることを意味するのである。その上カントン・コミューンの近傍には、大量人口を吸収できる町や都市も存在していない。これは、産業が伝統的な熟練労働に依っていること、また都市から村に至るまで各地域の中心地である限りは同等の重要性を与えられていること、と関連している。こうした中にあってブルーソンはコミューンの中心地と未だ伝統的絆で結ばれながらあらたな文化を摂取しているのである。

4　二つの農民性

外社会の変化とは従来論ぜられてきたとおり、確かに都市を中心に始まっている。農民があらたな文化に曳かれたことは、この点で都市の文化に曳かれたことでもある。彼らがそれをとり込もうとする限り、都市の性質、都市との関係が重要な意味をもつことになる。

かつて農民が直接かかわった外社会とは、いずれも共通の諸特徴を有していた。それは一定のコミュニティーが或る都市、町、大きな村を中心に結びつき、社会的・政治的・経済的な定結性をほぼ保っていたことである。コミュニティーの集合は一定の地域を構成していたことになる。あたらしい文化は主にこれらの中心を経由して、コミュニティーに入ってきた。中心地には行政機関、中高等学校や教区を代表する教会があった。役人・教師・牧師たちは、Red-field にならえば地域の外の「大きな伝統」と各コミュニティーの「小

さな伝統」との〝hinge[18]〟、あるいはWolfにならえば都市・国家レベルの文化とコミュニティーの文化との緩衝器となる〝broker[19]〟であった。

ベセーダスをみるときわれわれはこの地域が重要性を失なってしまったことを知る。それはあらたな文化をもたらすチャネルが移動したことと関係している。つまり近くの大都市との間に直接の絆が生じたのだ。そしてこれとともに〝hinge〟や〝broker〟の役割は、都市への移住者が担うようになっている。村人は彼らを媒介にして都市の生活様式をとり入れていく、といえる。

シナカンタンでは、上記の地域が未だ堅固に存在する。部落がハイウェイから直接都市文化をとり込むことは可能になりつつあるが、しかしサンクリストバルとの絆は尚も重要なものとして残っている。ここではINI職員、花売り、仲買人などが、部落と外とをとり結ぶ者として出現している。このことは、対都市関係がラディノーインディオの厳格な社会的区分を依然反映しつづけていることと関係していよう。その区分の存続は、同時に彼らの移住をも妨げているのである。

ブルーソンの事例では、地域が重要な意味をもって存在しつづけているのだが、〝hinge〟〝broker〟を見出すことは難しくなる。あたらしい文化はコミューンの中心地をつうじもたらされることが多い。しかしその中心地も、地域内部に認められた個性を維持する一コミュニティーとしての性質が強い。ブルーソンとの絆は従来存在しているし、両者の文化的ギャップも弱いままにとどまっている。

一方、ギャップの大きな地域外への移住は進んでいない。つまり〝hinge〟や〝broker〟の出現する必要は殆んど無いのである。そして彼らは地域の町や都市への移住、または村にとどまりながらの兼業をつうじてあらたな文化を摂取する。

以上のように、都市や町の性質、それらとの関係は農民の変化にきわめて大きな影響を及ぼしていることがわかる。彼らは可能であれば移住を試みるし、地域内の交流をなくしていくことさえある。しかしながらここでもわれわれは、なぜ彼らがあらたな文化をとり込もうとするのかについて、依然明らかにできないままにとどまる。つまり、彼らが外社会の変化にすすんで加わっていること、その為場合によっては、従来のコミュニティー内外の絆や組織そのものを変えざるをえなくなること、を認識するだけなのである。

それではコミュニティーの生活様式に対する固執についてはどうだろうか。

まずベセーダスやシナカンタンのように文化の仲介者が重要になっている事例では、彼らにもまたコミュニティーの一員としてのふるまいが要求されていることがわかる。仮りに伝統的地域が衰えつつある場合でも、「小さな伝統」は生きつづけているのである。一方ブルーソンのように、村人各自が地域内で外部の人間との絆を強めていくときには村の伝統的個性が強調されていく。他所者、更に移住者との間に明確な区分が設けられ、つまりコミュニティーの独自な生活が保たれる。

だがここで、農民のそうした一側面について各々説明づけること

はできるだろうか。ブルーソンの村人は地域内の交流が増すにつれ、なぜそこで認められた個性を強調していくのか。ベセーダスやシナカンタンで〝hinge〟や〝broker〟が大切となることはわかっても、なぜ彼らがコミュニティーメンバーでありつづけるのか。逆に、彼らを利用する仲間はその独自の生活を要求するのか。

〝broker〟たちについてみれば、こうした行動は欲求そのものにより説明づけられるかもしれない。つまり、彼らは都市の快適な生活とコミュニティーにおける威信の両方を享受することができる、という説明である。これを否定しきることはできないが、逆に肯定してしまうこともできない。なぜなら彼らがあたらしい生活への願望を公然とあらわしだしたのは、何より都市と関わりあう中においてであった。それならば威信の欲求はコミュニティーと関わることによって生じる、ということもまた否定しきることはできないだろう。つまり問題は、なぜ彼らがコミュニティーに関わりメンバーでありつづけようとするのか、という最初の疑問に戻ってしまう。

こうしてわれわれは、Ⅴでみた農民の二側面が依然因果関係によって説明づけられないまま、しかしよりその重要性を認識させて存在しつづけることを知るのである。

Ⅶ　結論

以上はシナカンタン、ベセーダス、ブルーソンの農民がたどった変化を、各々適応の過程として捉え直したものである。

彼らの変化にみた第一の側面は、外社会のあたらしい文化に対する志向であった。それは伝統的な諸制度や価値、信仰からは直接には導かれず、外社会との関係変化において生じるものだった。そして第二は、これとは異なり逆に対立する側面、つまり彼ら独自の生活様式に対する志向である。劣等感の一方で彼らは自文化への固執を保っている。それはあらたな文化の摂取の中でむしろはっきりとあらわれてきている。こうしてコミュニティーを単位として伝統の再編が起こるのだ。前者が彼らを全体社会に参加させつづけるものならば、後者は、にもかかわらずコミュニティーの文化を維持しその中に生きる「部分文化を有する部分社会」の一員たらしめているものということができよう。この変化の過程は、Redfieldの概念を用いれば二つの「伝統」を維持しつづける過程である。本論では結局、彼らの変化の核ともいえるふたつの農民性そのものを、因果分析によって説明づけられないままにおわった。だが農民文化の理解には、こうした説明づけられない側面にいかに近づくかということが重要な課題として残るのである。

ここで、Ⅰで提起した三つの課題についてとりまとめたい。

農民とコミュニティーの関係は、Ⅴの後半で検討したつもりである。彼らは変化の過程において相互の関係を変えていく。しかし依然、「ある似た種類のコミュニティーに生活する」。この場合コミュニティーは防御装置以上の意味を有し、そうした因果関係の理解をこえたところに存続している。

第二の外社会と農民の関連はⅤはじめ、及びⅥで考察した。外社

会との交流を積極的に進め、その文化を摂取するのも、またこの過程で自文化を維持しようとするのも農民自身である。変化が強制として感じられるとすれば、全体社会に参加している意識、及びコミュニティーメンバーとして要求される生活の観点から検討されるべき、と考える[20]。

第三は農民の社会的分化、生活の多様化と伝統との関係であり、ⅤⅥの各後半に検討したつもりである。いずれの事例も、コミュニティーで生活する者の大部分が依然暮らしと非分離なままに農業を営んでおり、これと並行に農業を離れる者、都市で多くを過ごす者も現われている。だがコミュニティーで暮らしていくかぎりは誰もが一定の生活様式を守らねばならない。

彼らがその仲間、外社会と関わりながら変化していく過程は、そのまま農民の二側面があらわれていく過程だといえる。こうして変化の中に独自の文化が保たれていくからこそ、われわれはⅠで述べた適応として彼らの姿を捉えることができたのだ。同じ過程はまた、いわゆる「農民」の諸特徴の幾つかが強められ逆に幾つかが弱められる現象を生じさせてもいる。すなわち、近代化の枠組では捉えられない変化を示すのである。

ただ、最後に付け加えたい問題は、彼らの以上の姿が脱農民(post-peasant)的方向への変化も含んでいるという、これまでにみてきた事実である。これは彼らが積極的に外社会の文化をとり込もうとした当然の結果に他ならないが、そのプロセスをつうじて各々共通の変化がコミュニティー内部にあらわれたのである[21]。すなわち、農業における特殊化・分業化・自給部門縮少と機械化、貨幣経済の浸透、商業や事務関係の仕事に対する評価の増大、教育と医療の普及、衣食住の都市化、消費志向の高まり、更には資産コントロールや活動領域における個人的自由の拡大、そして儀礼参加者の多様化などが上げられよう。

こうした傾向は、確かに従来の「農民」像から逸脱していく姿を示している。つまり彼らは「部分文化を有する部分社会」のまま、農業を依然生活の一部としながら、しかも、「農民」の諸特徴の幾つかを強めているその一方で、近代化・脱農民化の諸側面をもみせているのである。しかしながら、この現象自体は決して特別なものとはいえないだろう。なぜなら近年顕著な農民の定義の動揺、更には定義づけそのものの疑問視は、世界中に存続する彼らの文化とその変化の多様性を反映したものに他ならないからである。

このようにみると、われわれは「農民」と呼ばれる社会・文化を手掛かりとして、別のあらたな概念を必要とする研究に踏み込みつつあるように思える。

人類学は「伝統と近代」の問題を避けてとおるわけにはいかない。農民の研究はこの意味において、今後いよいよ重みを増していくだろう。だが様々に変貌を遂げる彼らの社会と文化を理解しようとするには、われわれは何よりわれわれ自身の農民像から再考していかなければならないのだ。

注

(1) Potter, 1967 : 378, Shanin, 1971 b : 16
(2) Redfield, 1956 : 27
(3) Kroeber, 1948 : 284
(4) Redfield, 1962 : 292
(5) ウルフ、一九七二・二七頁
(6) Weinberg, 1975 : X
(7) Mintz, 1973
(8) Migdal, 1974 : 15
(9) 各事例と文献は次のとおりである。
Zinacantan —— Cancian 1965, Collier 1973, Siverts 1969, Smith 1977, Vogt 1969. 1976
Becedas —— Brandes 1975
Bruson —— Weinberg 1975
(10) Cancian, 1965 : 11-12
(11) 村の三六一の家屋のうち九八がこれに当たる
(12) Nash, 1971 : 175
(13) Redfield 1956 : 25
(14) 勿論、変化において重要なのが部落・村だけだと結論する訳ではない。たとえばその内部には家庭に至るまで小さな社会集団が存続するし、また外部にも伝統的な町（シナカンタン）、更にIXで検討する小地域が存在している。こうした内外の地理的・文化的単位は現に互いの連関を含めて様々に変化をとげている。だが、これらの部落・村が農民の暮らしにとって過去から深い意味をもち、各々の生活様式を有してきたことを考えるなら、ここまでの検討をつうじて彼らの変化との関わりを強調しておいてよいだろう。
(15) Redfield, 1962 : 284
(16) たとえばStein(1957)の例ではシナカンタンと異なり、あらたな富・出稼ぎの賃金はあいかわらずフィエスタや土地につぎ込まれていく。
(17) たとえばブルーソンの既婚移住者は、五〇％がコミューン、八〇％がカントン内にとどまっている。
(18) Redfield, 1956 : 43
(19) Wolf, 1956 : 1075—1076
(20) 勿論、これはあくまで三つの事例に限られることではある。
(21) このことを逆にいえば、近代の都市の生活が国、地域をこえて共通な諸側面を有してるということになろう。

BIBLIOGRAPHY

Anderson, C. W. 1970 The Political Economy of Modern Spain. Madison, Wisconsin : Univ. of Wiscon Press.

Amsden, J. 1972 Collective Bargaing and Class Conflict in Spain. London.

Barret, R. A. 1972 Social Hierarchy and Intimacy in a Spanish Town. *Ethnology* vol. No.4 p. 386—398

Bergier, J. 1968 Problèms de l'Histoire Economique de la Suisse. Bern : Editions Francke

Brandes, H. B. 1975 Migration, Kinship, and Community : Tradition and Transition in a Spanish Village. New York : Academic Press

Cancian, F. 1965 Economic and Prestige in a Maya Community.

California : Stanford Univ. Press

Chiñas, B. 1972 'Comments'on Dalton's 'Peasantries in Anthropology and History'. *Current Anthropology* 13 (3—4) p. 407—408

Collier, J. F. 1973 Law and Social Cange in Zinacantan. California : Stanford Univ. Press

Dalton, G. 1972 Peasantries in Anthropology and History. Current Anthropology 13 (3—4) p.385—407

Davis, J. 1977 People of the Mediterranean : an Essay in Comparative Soclal Anthropology. London : Routledge and Kegan Paul

Deutsch and Weilenmann 1965 The Swiss City Canton : a Political Invention. *Comparative Studies in Society and History* 7 p.393—408

Eisenstadt, S. N. 1973 Tradition, Change, and Modernity. New York : John Wiley and Sons, Inc.

Erasmus, C. 1956 Culture Structure and Process : The Occurrence and Disappearance of Reciprocal Farm Labor. *Southwestern Journal of Anthropology* 12 p.444—469

Fallers, L. A. 1961 Are African Cultivators to Be Called 'Peasants'? Current Anthropology 2 p.108—110

Firth, R. 1951 Elements of Social Organization. London : Watts and Co.

Foster, G. M. 1953 What Is Folk Culture? *American Anthropologist* 55 p.159—173

1961 The Dynamic Contact : A Model for the Social Structure of a Mexican Peasant Village. *American Anthropologist* 63 p.1173—1192

1967 Introduction : What Is a Peasant? In J. M. Potter, M. N. Diaz, and G. M. Foster, ed., *Peasant Society : A Reader.* Boston : Little, Brown, p. 2—14

Friedl, E. 1964 Lagging Emulation in Post-Peasant Society. *American Anthropologist* 66 p.569—586

Geertz, C. 1962 Studies in Peasant Life : Community and Society. In B. J. Siegel, ed., *Biennial Review of Anthropology.*

Gusfield, J. R. 1967 Tradition and Modernity : Misplaced Polarities in the Study of Social Change, *American Journal of Sociology* 72 p. 351—362

Kaegi, W. 1942, 6 Historische Meditationen vol. 1, 2

（坂井直芳訳『小国家の理念——歴史的考察——』中央公論社 1979年）

Kenny, M. 1960 Patterns of Patronage in Spain. *Anthropological Quarterly* 33 p.14—22

Kroeber, A. L. 1948 Anthropology. NewYork : Harcourt, Brace and Co.

Levy, M. J. 1966 Modernization and the Structure of Societies. vol. 1, Prinston Univ; Press

Liao, W. K. 1933 The Individual and the Community. London : Kegan Paul, Treanch, Trubner and Co.

Maciver, R. M. 1917 Community : A Sociological Study. London : Macmillian and Co.

（中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ』ミネルヴァ書房、1975年）

Migdal, J. S. 1974 Peasants, Politics, and Revolution. Prinston : Prinston University Press

Mintz, S. W. 1973 A Note on the Definition of Peasantries. *The Journal of Peasant Studies* I—I p. 91—106

Moore, B. 1966 Social Origins of Dictatorship and Democracy : Lord and Peasant in the Making of the Modern World. Boston : Beacon Press

Nash, M. 1971 Market and Indian Peasant Economies. In T. Shanin, ed., *Peasants and Peasant Societies.* Middlesex : Penguin Books Ltd,

Pitt-Rivers, J. A. 1961 People of the Sierra. Chicago : Univ. of Chicago Press(First Edition 1954)

Potter, J. M. 1967 Peasants in the Modern World. In J. M. Potter, M. N. Diaz, and G. M. Foster, ed., *Peasant Society : A Reader.* Boston : Little, Brown, p.378—3883

Redfield, R. 1950 The Folk Culture of Yucatan

1955 The Little Community

1956 Peasant Society and Culture

1962 Human Nature and the Study of Society. vol.1 ed., by M. P. Redfield, Chicago : Univ. of Chicago Press

Rogers, E. M. 1969 Modernization among Peasants : The Impact of Communication. New York : Holt, Rinehart and Winston

Shanin, T. 1971 Introduction. In T. Shanin, ed., *Peasants and Peasant Societies. Middlesex* : Penguin Books Ltd, p.11—19

Siverts, H. 1969 Ethnic Stability and Boundary Dynamics in Southern Mexico. In F. Barth, ed., *Ethnic Groups and Boundaries.* Boston : Little, Brown and Co.

Smith, W. R. 1977 The Fiesta System and Economic Change. New York : Columbia Univ. Press

Spindler, L. S. 1977 Culture Change and Modernization : Mini-models and Case Studies. New York : Holt, Rinehart and Winston

Stavenhargen, R. 1970 Social Aspects of Agrarian Structure. In R. Stavenhargen, ed., *Agrarian Problems and Peasant Movements in Latin America.* New York : Doubleday Anchor p.225—270

1975 Social Classes in Agrarian Societies. New York : Doubleday Anchor

Stein, W. W. 1961 Hualcan : Life in the Highlands of Peru. New York : Cornell Univ. Press

Vogt, E. Z. 1969 Zinacantan. Massachusetts : Harvard Univ. Press

1976 Tortillas for the Gods : A Symbolic Analysis of Zinacantan Rituals. Massachusetts : Harvard Univ. Press

Tilly, C. 1975 The Formation of National States in Western Europe. Prinston

Weinberg, D. 1975 Peasant Wisdom. California : Univ. of California Press

1972 Cutting the Pie in the Swiss Alps. *Anthropological Quarterly,* 45—3

Wolf, E. R. 1955 Types of Latin American Peasantry. *American Anthropologist,* 57 p.452—471

1956 Aspects of Group Relations in a Complex Society : Mexico. *American Anthropologist*, 58 p.1065—1078

1957 Closed Corporate Communities in Mesoamerica and Central Java. *Southwestern Journal of Anthropology,* 13 p.1—18

1959 Sons of the Shaking Earth. Chicago : Univ. of Chi-

· cago Press

1969 Peasant Wars of the Twentieth Century. New York : Harper and Row,

1971 On Peasant Rebellions. In T. Shanin, ed., *Peasants and Peasant Societies.* Middlesex : Penguin Books Ltd., p.264—274

1972 『農民』 佐藤信行・黒田悦子訳 鹿島出版会
(Peasants : 1966 N. J; : Prentince—Hall)